

朱寿記念

澤田藤三

ふるさと佐目の

老ボケぶり

風林舎

題字——澤田藤司一

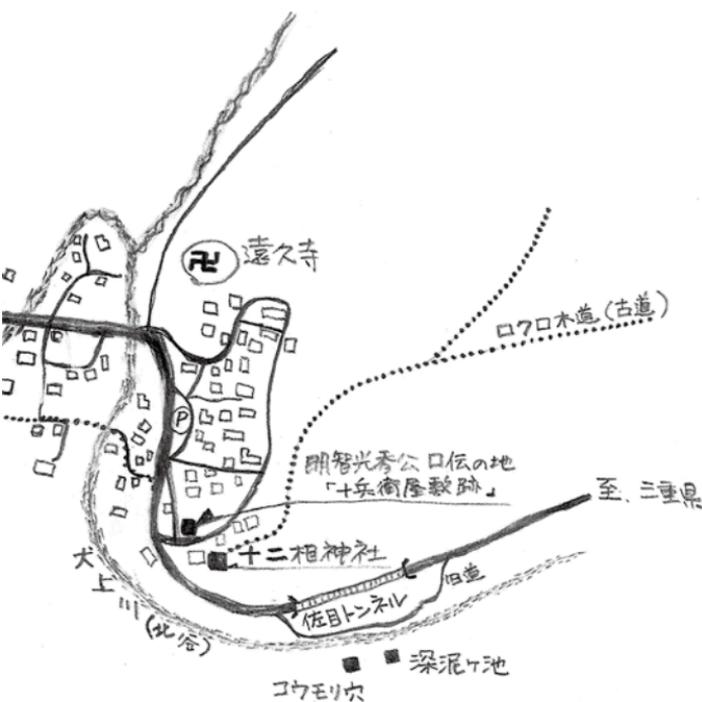
装画——大矢 美香

装幀——三田村圭造

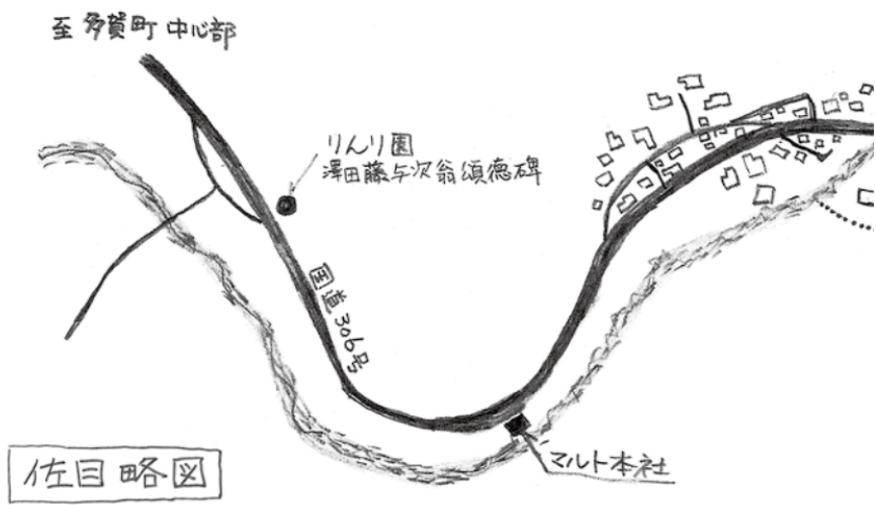
ふるさと住みの老ボケづり

目次

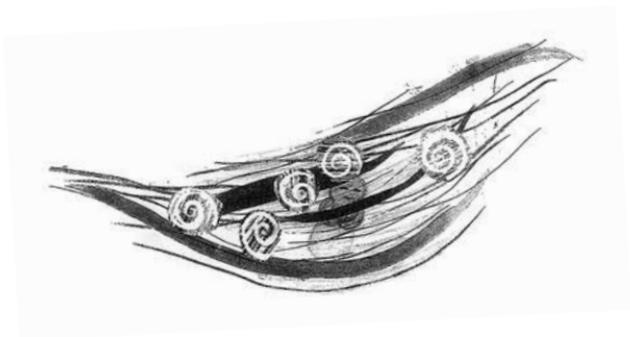
				1	はじめに	007
				2	コウモリ穴と深泥ヶ池	013
				3	コラム「壺」 浅井融	021
				4	ロクロ木道	031
				5	二つの佐目と佐目氏	039
					十二相神社	043



		10	8	7	6
		家系図「狭々城巻」	光秀の末裔、三宅さん	明智光秀の多賀出身説	法蔵寺
	11	9			
	堀畑道仙	葛籠藤			
あとがき					
123	117	101	097	087	069



はじめに



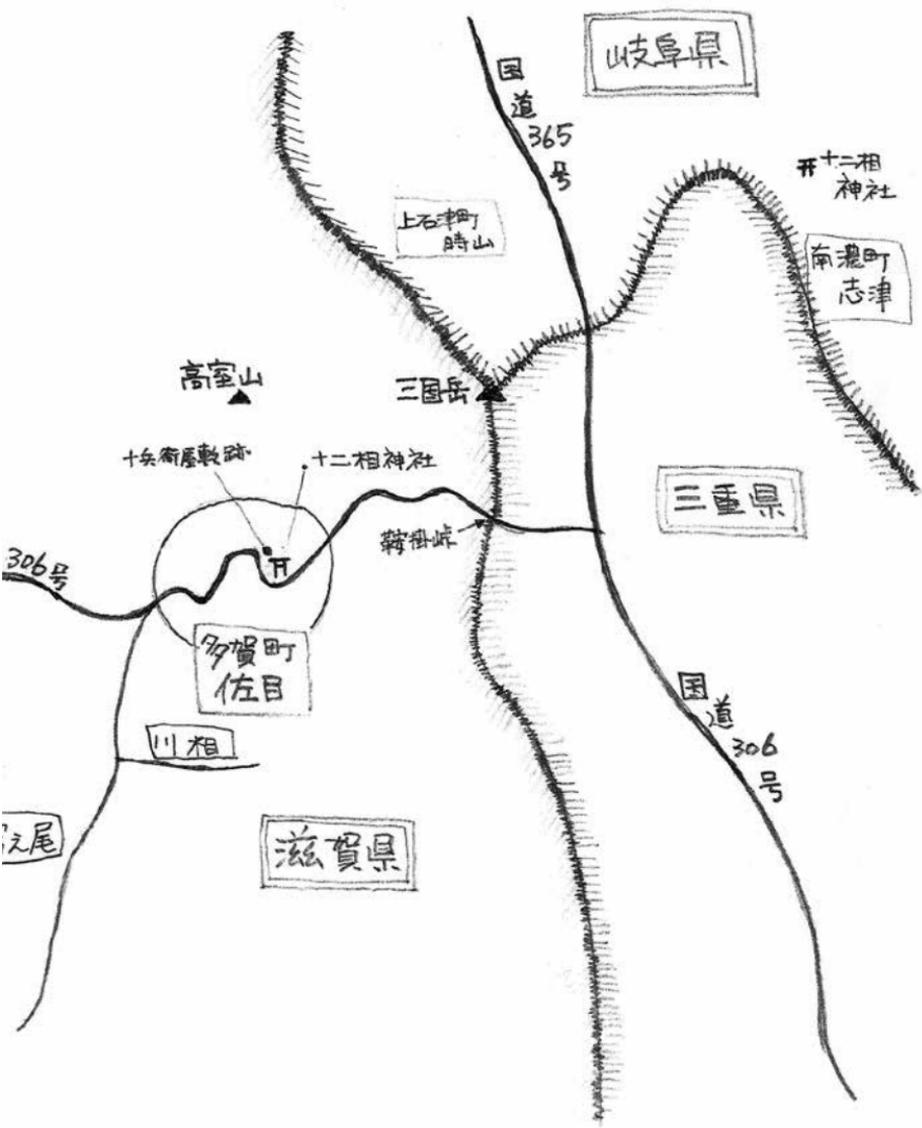
老いることは、だんだん変化していく自分探しである。半年、半年体調が変化していく。それは病気ではなく自然なことだ。また、心も体とともに変化していく。「断捨離」に気づくのは、老年期に入る予告だと思う。老年期に入ってくると、前を見るより後ろを見ることが多くなるようだ。

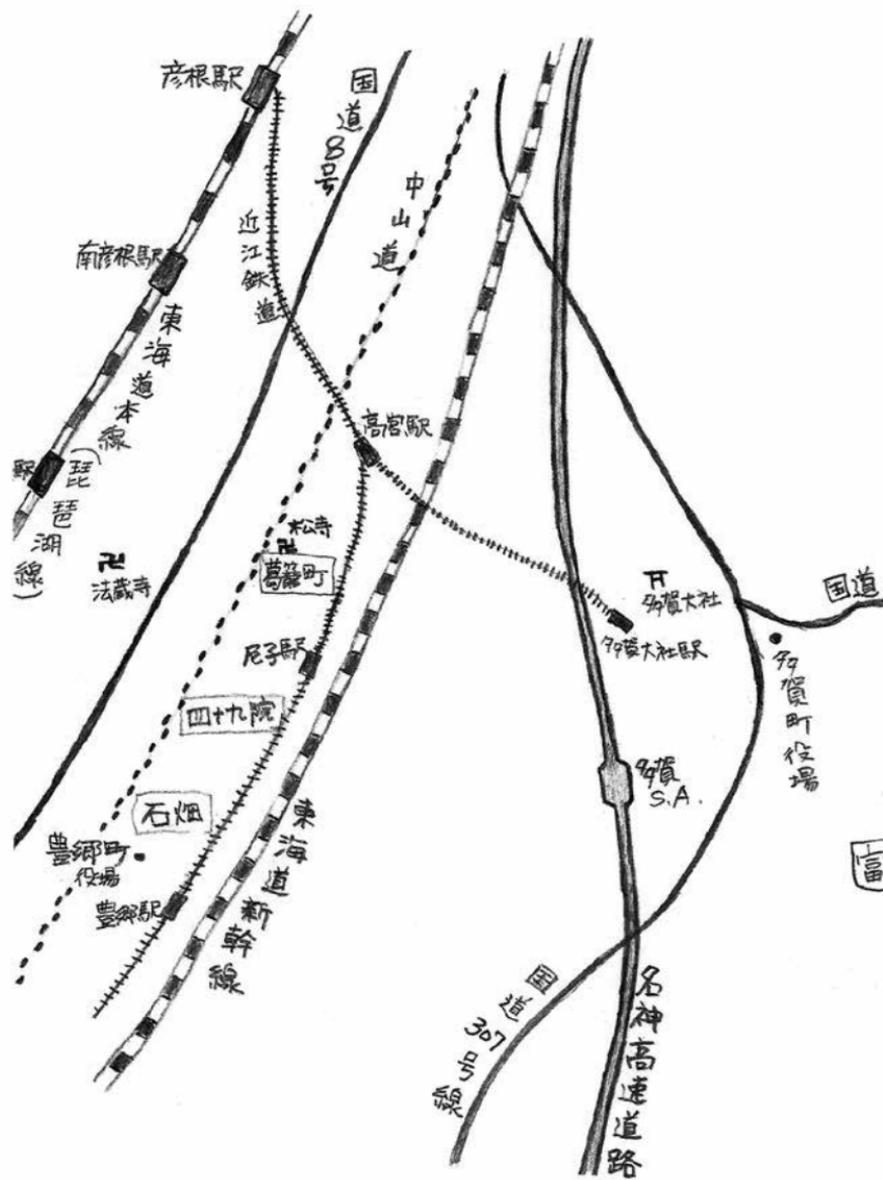
佐目の歴史は、縄文人が住んでいたという「コウモリ穴（洞窟）」からはじまる。また国道306号線の原形である鞍掛峠（鈴鹿山脈）を越える「ロクロ木道」であろう。史実として確かで、一番古いものは神仏習合の杜である「十二相神社」だ。

1472年以降、武将、那須与一（弓の名手）を先祖にもつ法蔵寺が約100年間、佐目に実在している。だが、その歴史は明らかにされていない。明智光秀の出生地の可能性もある。「人生100年時代」と言われている。「まさか？」と思っていたが、だんだん近づいてきた。体は元気でも、頭の方が元気を失いつつある。残るのは気力だけである。

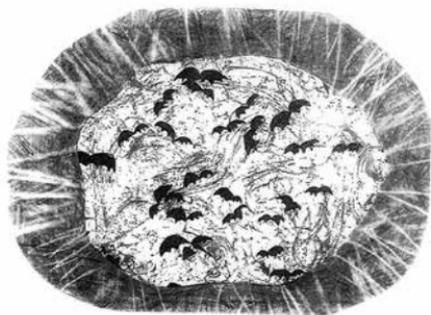
しかしこれも当てにならない。時は止められないので、一刻を大切にしたい。米寿を迎える年齢になった。今までの自分からは想像ができないことに興味を感じはじめている。

手探りをしながら、信頼をする人々に教えていただいで、元気なあいだにふるさと佐目の『古いボケつづり』を書き残しておこうと思った。





1
コウモリ穴と
深泥^{みどろ}
ヶ^が
池^{いけ}



原始的な自然に圧倒

佐目の歴史は、縄文人が住んでいたという「コウモリ穴」からはじまる。佐目トンネル入り口付近を右へ旧国道306号線（廃道）を約1キロほど入り、犬上川対岸の山の中腹にある洞窟のことである。

昭和4年（1929）に京都大学小牧實繁氏、直良信夫氏、藤岡謙次郎氏等によって発掘調査され、縄文時代の土器の破片や動物の骨が数点発見されている。土器の破片は縄文末期紀元前2000年頃の土器であるようだ。

コウモリ穴から約100メートル上流に深泥ヶ池という風穴がある。ここからも立命館大学の探検部によって「壺」が発見されている。犬上川の川底より10メートル程高い位置にある風穴（洞窟）だ。人間が住んでいたのか、流れ入ったのかはわからない。残念ながら旧住友セメント（株）の鉱区内であり、実際に入って調べることはできなかった。

1 コウモリ穴と深泥ヶ池



出ツボ



八畳岩

深泥ヶ池から下ったところに「出ツボ」という湧水があり、多くの水が流れてきている。その付近に「八畳岩」という大きな石灰岩の石が川の中に入り、原始的な大自然も残っている。昭和51年(1976)当時、佐目小に赴任されていた浅井融先生(故人)が『多賀町の石灰洞』(1989発行・多賀町)のなかで洞窟の中で発見された壺のことについて書かれていたので紹介したい(22ページより)。



カーブミラーが残り、かつてバスも通ったといわれる旧国道306号線（廃線）。
ここから林間を下り犬上川対岸のコウモリ穴（佐目風穴）まで20分近くかかる

1 コウモリ穴と深泥ヶ池



途中の「へび塚」公園にある案内板（1993年、県彦根土木事務所建立、上写真）と川の中央に鎮座する石灰岩の岩



1 コウモリ穴と深泥ヶ池



犬上川北流には八畳岩など奇岩がたくさんある

2

コラム「壺」

浅井融_{とある}



私が佐目の壺の話を聞いたのは、佐目に赴任して1・2年たった頃だったと思いますから、昭和51・52年だったでしょう。佐目の大岩（八畳岩とも呼ばれている）を50メートルほど上へ行った河原にある洞窟を、立命館大学の探検部が調査し、洞窟の奥で土器を発見したのだそうです。後で、その話を聞いた村人が、胸まで水につかって中に入り、壺と3、4枚の皿を取り出したのですが、その後、壺も皿も行方がわからなくなってしまったということだったのです。

もの好きな私は、一度その洞窟に入って見たいと思って、何度か覗きに行つたのですが、雑草に覆われた洞窟の入口には蚊かブヨのような虫がいっぱい飛んでいました。懐中電灯で照らし出された中には、濁った水が洞窟の入口いっぱい、どびんと溜まっていて、到底私などが中へ入れる状態ではありませんでした。

壺の行方のことですが、これは本当に偶然見つけたのです。私の家から車で15分程の所に風土記の丘があります。近いものですから時折見学に行つていたのですが、ある時、陳列場に入った正面に展示してあるのを見つけたのです。もちろん、行方不明の壺と同一のものかどうかは「佐目の出土」と書かれた説明だけではわかりませんでした。大きさといい鍾乳石がついているようすといい、行方不明の壺に間違いのないと思いました。

そして、この壺が、どうしてあの洞窟の中にあつたのだろう。水に押し流されて入つたの

だろうか。とするなら、あの洞窟の近くかどこかに、大昔の人が住んでいたのだろうか。あるいは洞窟の中に住んでいたのだろうか。それは、どんな人達なのだろう。この壺をガラス越しでなしにもっとしっかり見てみたい。(もちろん私が壺を手にとつてみたところで何もわかるはずはないのですが…) 一人で、あれやこれやと思いを大昔に走らせていました。

話は変わりますが、犬上郡には郡誌というものがあります。従つて佐目についても古老が書き残したものが少し残っているぐらいで、佐目の昔のようすは、もう一つはつきりしません。けれども、年寄に話を聞いたり、村の中をうろろ歩いたりしてみると、いろんな伝説だとか、道や村の移り変わりを示す石垣や橋げたの残り、古文書などにでくわします。それらは、子供達の社会科の学習に地域教材として大変役立つのですが、6年で学習する大昔の暮らしの地域教材となると殆ど何もありません。だから、若し、洞窟や壺のことが詳しくわかるなら、すばらしい教材になるし、更に、それは自分達の村のはじめがわかることであり、自分達の村に誇りと愛着を感じる一助になるのではないかと思つていました。

その思いが特に強くなつたのは、佐目のもう一つの洞窟、コウモリ穴についての調査結果を知ることができてからでした。

思い切つて県の文化財保護課に佐目の壺についてお尋ねの手紙を出したのです。返事には、おおよそ次のようなことが書かれていました。

「風土記の丘に展示してあった壺は、佐目の洞窟から立命館大学の探検部が発見した壺であること。その壺についての詳しいことは、(昔に県へ提出されたものである等で) わからないこと。『コウモリ穴』からも出土品があつて、そのことは小牧實繁先生等の論文『近江佐目の洞窟遺蹟』に詳しく載っていること。」

私は早速、近くの図書館にその本の有無を尋ねたのですが、1週間ほどして図書館からの連絡で、その本はこの辺の図書館にはないが国会図書館にならあるので必要ページをコピーしてもらつて送つてもらふということでした。

コピーが届いたのは2月頃でしたか。雪の少ない冬とはいえ、山の村は2〜30センチの雪におおわれていました。大きな封筒の中の印刷物はひどく古めかしい文体で書かれていました。昭和4年に京都大学の小牧先生等が調査された時のものでした。

「骨は凡て破損してゐて完全なものとはなない。之はその多くが食糧とされたがためであるに外ならない。……獸類のあるものは、自然的に洞窟中に流れ込んだものもある事だろうか。大體として佐目洞窟人によつて捕食されたものが多いだろう……この洞窟人は全く此の洞窟を根拠地として……」

これらの文字が私の目に飛び込んできました。と同時に、いつか本で読んだ中国の洞窟遺蹟群のようすが思い出されました。そして続いて「ひよつとしたらコウモリ穴も壺の出た穴

も洞窟遺蹟ではないだろうか。この付近のいくつかの洞窟に大昔の人々が住んでいたのではないだろうか」と、または私も大昔の世界を歩きたかったのでした。

ちょうどその頃、ケイビング大会が開催され、幸いなことに私も洞窟に入れさせてもらい、命からがら壺があつたという現場を見ることができました。頭がやつと通るような洞窟の中を上へ下へとはいずれまわりながら、私は「壺は絶対水で流れ込んだのではない」と感じました。と同時に、こんな洞窟の中に人が住んでいたのでもない、という気がしました。

ただ河原からの洞窟への入口は、今は半分砂にうまっています。以前はもつと大きなほら穴ではなかつたかと思うのです。だからそこに住んでいて、壺などだけをほら穴の奥に入れたのではないか、そんな気もしました。でも、何故？ 貯蔵庫？ 一時のかくれ場所、何か祈りのような場所？ 何一つ解けないもどかしさの中で、今度は教育委員会にお願いしたりなどして、念願の壺の里帰りを実現してもらいました。子供達にも村の人にも佐目の宝を見てもらいました。傷つけてはならじと慎重に扱う壺はずつしり重く、その上、鍾乳石がついていて、すわりが悪く、動かすたびに汗が出るほど緊張したものです。

壺は須恵器でした。須恵器というと土師器とちがつて朝鮮半島から渡来した人たちが作ったり、技術を伝えたりしたもので堅牢だから、古墳時代後半から平安時代にわたる長い間、人々に重宝されたのでしよう。

佐目の壺は7、8世紀頃のものではないかということです。ただ、壺にくつついた多量の鍾乳石が仮に7、8世紀から今日までの間にできるものなのかどうか疑問だったのですが、それは温度などの状態によつてはでき得るということでした。

壺は長い間横になった状態だったのでしょうか。壺の一側面に鍾乳石がついていて、それが壺の口を半分以上おおうように垂れ下がってきています。そのすき間から中をのぞくと、内側の一部に青海波の文様が見られるのです。内側に板などをあてて表面をたたいて形を整えた証拠だとしても、では、なぜ青海波の文様がつく板か何かを選んだのでしょうか。青海波はめでたいときに使う文様です。私には不用意についたものではなくて、意識してつけたもののように思えてならないのです。

内側にめでたい文様がついた壺、両側に把手らしいものがついていたらしい壺、これらは何を語りかけているのでしょうか。

しかもその壺が皿と一緒に洞窟からでてくるとは……。コウモリ穴から出た土器片は縄文土器片なので、その時代の人だったら、ある一時期でもコウモリ穴に住んでいたかもしれないが、ろくろまで使ったらしい須恵器の持ち主たちの時代の人が、洞窟で暮らすことがあったのでしょうか。問題は、やっぱりもとにもどってしまふのです。

佐目の近くに梨の木という所があります。そこから祭りに使われたらしい須恵器の高杯や



深泥ヶ池の洞窟で土器（壺や皿）を発見した森笹さんの話を載せたパネルと発見された壺を展示（多賀町立博物館の常設展示室）

役所で使われたらしい硯が出土しています。これらと関係がないのでしょうか。

今は一軒の家もありますが、つぼ村という村の名も残っています。

八畳岩の下流には夜干し岩という岩があつて、昼間洗濯していると川上から鬼がおそってくるから、夜に洗濯をして干したという伝説が残っています。何か耳をそば立てさせる話です。

先日、もう一度壺の現場が見たくて洞窟に入ろうとしたら、入口に柵がめぐらされて入ることができませんでした。

壺も里帰りが終わってどこかへ帰っていきました。

佐目のはじまりが、何もわからないままにまた忘れられようとしています。

私は、あの壺を元の洞窟にかえしてやりたいし、洞窟とともに地域の宝として子供達の学習に大いに活用していけるようにしたいものだと思っています。

3

口
ク
口
木
道



文化・産業・情報伝えた古道

土地台帳には今でも「大字佐目ロクロ木〇〇番地」の名が残る。ロクロとは木工や陶芸の成形に用いられる回転式の台を思い浮かべるが、佐目周辺の山々はロクロの樹として使うケヤキの原木が多く自生していた。ロクロの名もここからきている。

ロクロ木（ぎ）道というのは、佐目と大君ヶ畑の中間にある古道の名である。

この道は十二相神社の鳥居をくぐり、十兵衛屋敷跡の横を通り十二相神社の下から陣屋に向かつて登る道である。

腰越山城跡のある「中のタワ」（地名）を右に曲がり、大君ヶ畑（おじがはた）、鞍掛峠を越え伊勢の国へいく伊勢街道であり、今の国道306号線の原形でもある。

多賀町に三国ヶ岳という山がある。近江国、伊勢国、美濃国が隣接する山岳である。

古代の交通は、人が歩くことであり、隣の国へ行くには山の尾根を歩くか、山を越えるの

3 ロクロ木道



十二相神社から高室山登山道入り口（下写真）まで少し登り、腰越の城（砦）跡を左に曲がり歩き続けるとロクロ木道に出会う

が一番早い方法で、この山道が時代の文化、産業、情報を伝えたのである。

ロクロ木から大君ヶ畑を過ぎるといよいよ急な鞍掛峠である。焼尾峠とも言う。

峠を越えた伊勢藤原村では、伊勢の魚類と近江大君ヶ畑の大豆、小豆等も交換されていたようだ。また近江の国から美濃の国に入るのも大君ヶ畑からである。五僧峠を越え上石津に入る道は、島津義弘公が関ヶ原の戦いで敗れ、鹿児島伊集院町に帰る時に通った、いわゆる「島津越え」といわれる山道である。佐目には陣屋の山も通ったという伝承もある。

惟喬親王伝説

美濃の時山から佐目まで歩いて約2時間の距離を、昔の花嫁さんは山道を歩いて来たようだ。また山仕事の手伝い、養蚕の手伝い等の交流が盛んに行われていた。

ロクロという「木地師の祖」とされる惟喬（これたか）親王（844～897）の名前を思い出さずにはおられない。平安時代前期の文徳天皇の第一皇子だったが、藤原氏の血を引く弟（惟仁親王）に皇位を奪われ悲運の皇子といわれる。永源寺町君ヶ畑（東近江市永源寺町君ヶ畑）と同じように、ここ大君ヶ畑にも惟喬親王伝説が残り、大君ヶ畑系の木地師もいたという。

厳密に言えば、ロクロ木道は「中のタワ」から大君ヶ畑までの約2キロの道である。佐目

から「中のタワ」まで行く道は2本ある。十二相神社の下から行く道と、北出から行く道が「中のタワ」で合流し、その付近に腰越山城跡がある。

戦国武将も駆け抜けた道

戦国時代の武将もロクロ木道を通っている。

元亀元年9月12日（1570年10月11日）から天正8年8月2日（1580年9月10日）にかけての浄土真宗本願寺勢力と織田信長との戦い「石山合戦」に伴い、伊勢長島（現在の三重県桑名市、伊勢国と尾張国の境界付近）を中心とした地域で起こった長島一向一揆では、織田信長軍は伊勢長島を攻めるため、1573年9月4日に佐目を通り、長島に行つたとされている。

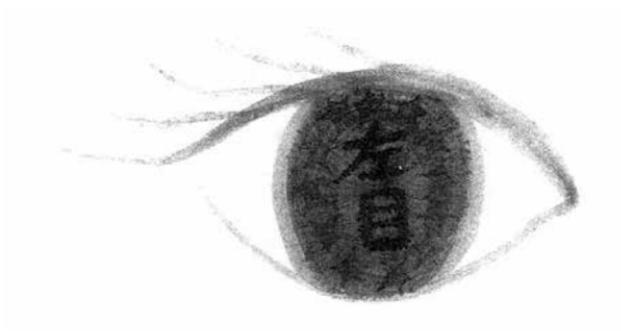
織田信長が本能寺で亡くなり、羽柴秀吉が山崎合戦で明智光秀を倒し、天正10年（1582）6月27日、信長の跡目と遺領分配会議が行われ、その不満のもつれから秀吉は、柴田勝家や織田信孝、滝川一益との戦いを準備。滝川一益は伊勢亀山城を奪い、北伊勢に勢力を伸ばそうとしていた。

天正11年2月に秀吉は、いよいよ北伊勢の侵略を計画し長浜に到着していた。伊勢侵略軍を三手に分けて、中央の大君ヶ畑越えを秀吉、右翼を羽柴秀吉が中心に安楽越え、左翼を三

好秀次が中心になって土岐多羅越えをしている。いずれも山路の難所を越えての北伊勢攻めだった。秀吉は、長浜から多賀を通り佐目からロクロ木道を歩き、鞍掛峠を越えている。

佐目のロクロ木道は戦国武将の戦略上、おおきな役割を担った山路でもあったのだ。

4
二つの佐目と佐目氏



左目と佐目

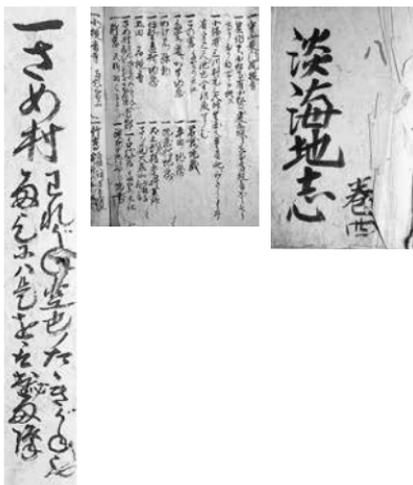
佐目の歴史を探る中で「佐目（さめ）」という名の村が、近場で二つ存在することがわかった。ここ多賀町と東近江市の永源寺ダムの下に沈んだ村の二つだ。

元禄9年（1696）の村明細帳写『佐目共有文書』には「左の目一眼の童子が暴れ狂った怪牛を倒し村を救った」ことから「左目」が「佐目」になったという伝承がある。

承平年間（931～938）の平安中期に作られた辞書『和名類聚抄（わみようるいじゅしょう）』の犬上郡甲良郷（庄）に大滝・佐目・三国岳の記述がある。どうも多賀町の佐目は永源寺の佐目の伝承「左の目一眼の童子」説が有力であるようだ。

また、初刊が昭和4年（1929）の『近江愛知郡誌』には「佐目氏は和氣氏より出て、犬上郡佐目村に住んでいたので佐目と言う氏を名乗り、その後、小椋谷（永源寺）に移住した」とある。

4 二つの佐目と佐目氏



莊厳寺（近江八幡市）所蔵の空也上人立像（像高84cm）県立琵琶湖文化館提供

多賀信仰を全国に広め、神札を配り多賀講の方を接待する多賀坊人（たがぼうにん）。

この多賀坊人の子孫である三木家にあつた『淡海地誌』（1690年前後刊・原田蔵六著）には佐目の空也上人の伝承（左）が載っていて、「さめ村 われがね空也ノたたきがね也雨乞にハ是を取出必雨降」とある。空也上人の叩き鉦（かね）を雨乞いで叩けば、必ず雨が降る、という意味だが、佐目や大君ヶ畑の「雨乞踊り」はこれがはじまりかもしれない。

いずれにしるこれらの古文書から古代豪族和氣氏出身の「佐目氏」が奈良時代にはすでに存在していたことがわかる。

5

十二じゅうに相そう神社







佐目の十二相神社。十二柱の権現様を表す「十二の灯火」が十二相神社名の由来と言う

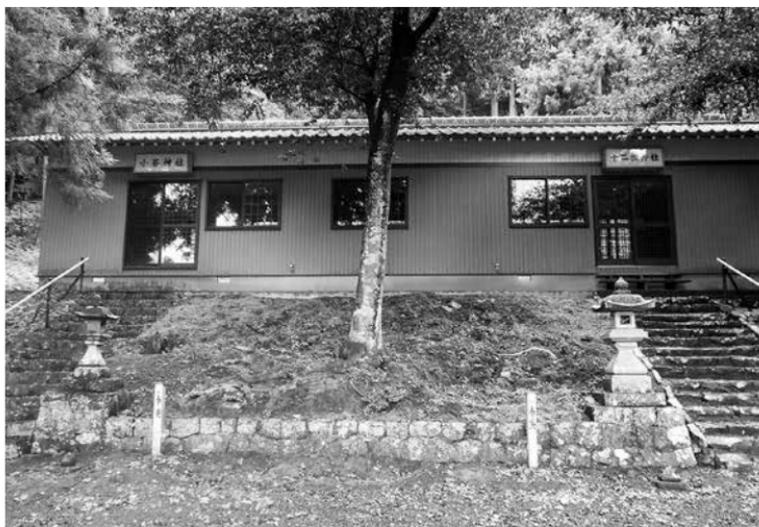


樹齢500～800年の大杉のご神木が社殿の正面の上下段に植えられている

5 十二相神社



拝殿の向かいの地藏堂（父、藤與次が奉納）



海津市南濃町志津の十二相神社（写真上右）と小谷神社の鳥居（同左）と拝殿（右が十二相神社、左が小谷神社）。拝殿の後ろに本殿がある



拝殿は2007年に新築されている

天神七代地神五代

十二相神社はいつ建てられたものかはわかっていない。

神社にある大杉の樹齢は推定500〜800年といわれている。自生したのではなく、神社建立時に景観として杉の苗木を植えたのであろう。長い歴史を感じる神域である。

十二相神社の拝殿は、れっきとした寺院建築である。神社の拝殿は、本社の前にあるのが今ある場所は拝殿の位置ではない。神仏習合の杜である。十二相神社は拝殿の内部に地藏尊が祀られている。さらに拝殿の向かいには地藏堂があり、裏には80体以上のお地藏さんが置かれている。鳥居前にも地藏堂がある。

岐阜県海津市南濃町の古い文献には室町時代の1390年、海津市南濃町志津の十二相神社に佐目の十二相神社より「天神七代地神五代の十二柱神勧請」とある。

江戸時代までは「十二相権現社」と言い、神仏習合の神社であったが、明治維新の神仏分

離令により、権現の神号や修験道は廃され、祭神のみが残された。十二社とかき「じゅうにそう」と読む神社もある。

文明2年（1470）、小川十平によって再興された南濃町の十二相神社は「十二社大権現社」とある。多賀には修験者・役行者の伝説や権現谷という地名も残っているから、神仏習合であったのだろう。唯一、十二柱の権現様を表す「十二の灯火」が十二相神社名の由来を物語っている。

天神初代 国之常立神（クニノトコタチカミ）

天神二代 豊雲野神（トヨクモノカミ）

天神三代 宇比地邇神（ウヒジニカミ）

須比智邇神（スヒジニカミ）

天神四代 角杙神（ツノグイカミ）

活杙神（イクグイカミ）

天神五代 意富斗能地神（オオトノジカミ）

大斗乃弁神（オオトノベカミ）

天神六代 淤母陀琉神（オモダルカミ）

阿夜訶志古泥神（アヤカシコネカミ）

天神七代

伊邪那岐神（イザナギカミ）

多賀大社

伊邪那美神（イザナミカミ）

地神初代

天照大神（アマテラスオオミカミ）

地神二代

天忍穗耳尊（アマノオシホミミノミコト）

地神三代

瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）

地神四代

火折尊（ヒオリノミコト）

地神五代

鷓鷯草葺不合尊（ウガヤフキアエズノミコト）

十二相神社の「ホタ神様」

十二相神社に祀られている一番古いご神像は、800年～1000年前のご神体で完全に朽ちて原形をとどめていない。形状は、頭と胴体の一部だけが残っていて、ご神像とは見えない。いわゆる「ホタ（槽）」である。木質の硬い部分だけが残っている、木の骨である。

もう一体ご神像がほぼ完全な形で祀られている。このご神像は、室町時代（15世紀）に彫られているようで、頭上に幞頭（ぼくとう）冠をかぶり持ち物は欠失しているが、左手に宝珠、右手に錫杖（しゃくじょう）、衣は神服のようである。「ホタ神様」の再生の可能性がある。

ホタは樹の精霊

佐目には、十二相神社にお祀りしている祭神は「ホタ（梢）神様」だと言う伝説がある。「ホタ」は自然の大木が枯れた木の骨、樹の精霊である。山岳信仰の時代は、山、滝、岩、樹等を神として崇拜していたのだ。

佐目の「ホタ神様」の古い話が二つある。

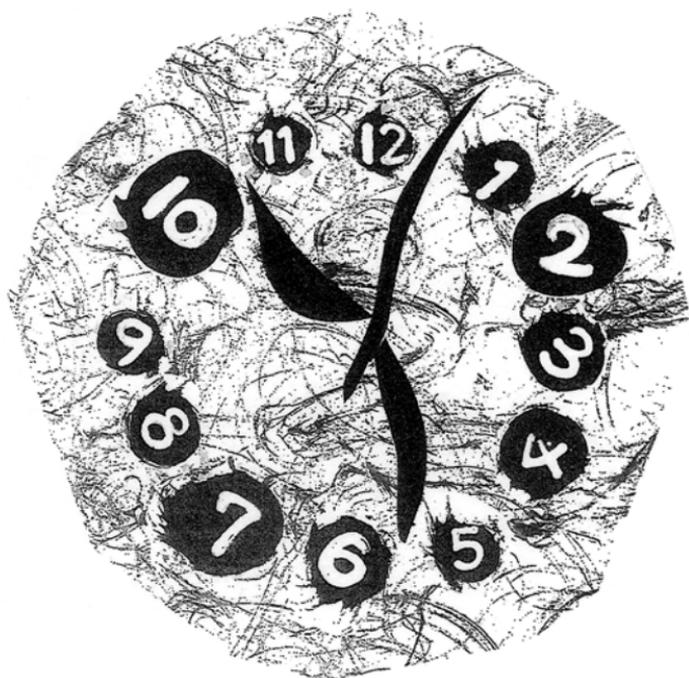
(一) 昔、南後谷村の太郎長という人が大和の国木津川を渡っているとき、足に捲きつきどうしても歩けないので不思議さを感じ「御性アル方ナラ私の肩へ」と言うと、足に捲きついたのは流木で、その流木が太郎長の肩に飛び乗った。太郎長はこれを神様と信じ、大切に持ち帰り十二相神社に祀ったという話。

(二) 佐目の山に大きな樹がありその大木が腐り、その梢木が今の十二相神社の社殿のある場所であると言う話。

いずれにしても古い昔話で、それを実証するものは何にもない。

『淡海温故録』の中の文章に十兵衛光秀が、越前の朝倉家に向かう途中「川流レ大黒天ヲ拾イ」とある。こんな「ホタ神様」の話を明智光秀は知っていたのではないだろうか。

私達の祖先は神への強い思いがあり、そんな話を今に伝えていくるのである。



「十二」の意味

佐目の氏神様を祀っている宮様は十二相神社という名である。時計にある数字は十二。短針が二回廻れば一日である。一年は十二ヶ月。干支は十二支。十二と云う数字は時の流れであり、時の流れは歴史である。「十二相」という名と深いつながりがあるのだろうか。残念ながら十二相神社に関する歴史的な古文書は何も残っていない。

佐目の十二相神社の主祭神は「少彦名命（スクナヒコナノミコト）」であるが、「ホタ神様」であるという口伝も残っている。

獅子吼山遠久寺

佐目十兵衛会のメンバー数人で海津市南濃町津屋にある本慶寺を訪ねたことがある。この寺は1400年代に犬上郡河瀬（現彦根市）から南濃町志津に移り、現在は同町津屋の津屋城跡にある立派な真宗大谷派の寺院である。

応永20年（1413）、河瀬にあった獅子吼山遠久寺が志津に移ったのが「獅子吼山遠久院本慶寺」である。

志津には佐目の十二相神社と同じ名の神社があり、「佐目ヨリ天神七代地神五代ノ神柱勸請」という古文書も残ることは前述した。



5 十二相神社



1413年に河瀬から南濃町志津に移ったとされる獅子吼山遠久院本慶寺は真宗大谷派の立派な寺院

天正2年(1574)に佐目法蔵寺が、獅子吼山遠久寺があつた寺跡付近に移動しているが、これは戦国時代の複雑な社会情勢が引き起こした現象だろうと思う。

なぜ佐目から志津に分神されたのか、何か手がかりはないものかと本慶寺のご住職に聞いてみたところ「確かな資料はなく推測ですが、大昔山道を通り近江の国へ旅し、佐目の十二相神社で休憩をした時、尊厳さを感じ神様を譲り受けたのではないでしょうか」と話された。

佐目の十二相神社に書き残した古文書はないが、実際四つの史実がある。

(一) 500〜800年生きている杉の大樹

「滋賀の銘木」に選ばれている杉の大木が、社殿正面の上段と下段に整然と四本並んで植えられている。上段のご神木の幹の周りが6・5メートルと6・15メートル、下段の2本は4・9メートルと4・05メートルの大きな杉の大木であり、その他に自然木か植林木か判らない大木が数本ある。

十二相神社は「鎮守の森」に相応しい場所にある。人間が住む所より高い土地また村の上(かみ)にあり、大きな大木に囲まれ靈気を感じる場所である。主祭神を祀るまでは十二相権現という熊野三山の様な山岳信仰であつたのだらうと思われる。それは神社の下を古道(伊勢、美濃の国に通ずる)が通っている。

(二) 13世紀時代の宝篋印塔

長い歲月風雪に耐え、宝篋印塔（ほうきょういんとう）の屋根の部分が無理に欠いたような痛々しい風格で野ざらし状態に在る。誰の宝篋印塔なのか。佐々木京極に関する人か、佐目氏の宝篋印塔か、いずれにしても興味深い。

(三) 推定800～1000年前の朽ちた御神像

口伝で「ホタ神様」と言われているが、自然木ではなく人間の手で彫られた御神像である。長い歲月に朽ちて原形をとどめていないのである。

もう一体500年（推定）程前に彫られた御神像が祀られている。これは朽ちた御神像（ホタ神様）の代わりに彫られたのだろう。大きさが似ており、形はしっかりしている。御神体に木の節が使われているので、地元の樹である証拠だそうだ。

(四) 観音菩薩と地藏菩薩の二体の仏像

私たちが拝殿と云っているのは間違ひなく寺社である。法蔵寺が佐目に来るまでにあった寺であろう。そこに二体の仏像が祀られていたが、明治時代の神仏分離令により、本殿に遣し二体の仏像を守ったと思われる。

謎の多い宝篋印塔

十二相神社の森の中に、まるで隠れるように宝篋印塔が安置されている。長い歳月のなかで風雪に耐え、痛々しい様である。供養塔として崇めるような安置の仕方ではない。ただ置いてあるという感じだ。

ある話では、この宝篋印塔は十二相神社の裏を流れる犬上川に捨てられているのを拾い上げ、十二相神社の森の中に安置したと言う説がある。あまり人目に付かないような安置のかたにも見える。いずれにしても、階層の高い人の供養塔であることは間違いないらしい。私の推理では、もし、佐目に明智光秀の一族が住んでいたとしたら、証拠隠滅のために川に捨てたというのは十分考えられ不思議なことではない。戦国時代のことであるから、自分達一族の身の安全を守るためにやるべき方法で、証拠品を土の中に埋めたり、川に流したりしたことは、昔の時代には多くある例である。

十二相神社の森の中にある宝篋印塔が、明智十兵衛光秀に関係があるとすれば面白い。

しかし専門家に見ていただくと、十二相神社の中にある宝篋印塔は推定1350年代の室町時代の造りであるようだ。この年代に佐目に有名な偉人がいたことになる。明智光秀が生まれた時代より遙かに古く、証拠隠滅のため、川に捨てた説は消えることになる。一体誰の宝篋印塔なのか。だんだん興味が増してくる。

徳源院の宝篋印塔

話は変わり、京極氏代々の菩提寺・清滝寺徳源院（米原市清滝）には、多くの宝篋印塔があると聞き訪ねてみた。

境内の裏山に36基ほど整然と立ち並ぶ宝篋印塔。そのうち一基だけ列から外れたところにある宝篋印塔は、十二相神社の森の中にある宝篋印塔と形も大きさも、石の色もよく似ている。

宝篋印塔には墓石と供養塔の両面があるが、この宝篋印塔は北畠具行の墓のようだ。北畠具行（1290～1332）は鎌倉時代の公卿で後醍醐天皇とともに倒幕運動に参加し、元弘元年（1331）笠置山に籠城して捕らえられて鎌倉へ護送される途中、幕府から探使が派遣され、処刑を迫ったためこの地で近江守護京極（佐々木）道誉によって斬首。境内と近くの山に墓を建て菩提を弔ったようである。山中にある墓（宝篋印塔）は国指定史跡になっている。北畠具行卿の祥月命日にあたる6月19日には毎年、地元の史跡保存会の人たちによって「北畠具行卿碑前祭」が行われているという話も聞いた。

徳源院のご住職に十二相神社の説明をすると「あの辺（佐目）は六角氏と京極氏が領地争いをした境目なので、京極氏の誰かの墓かも知れませんが」と話された。

ここでまた私の推理がはじまる。宝篋印塔を川へ捨てたのは十兵衛光秀の父親十左衛門で



佐目十二相神社の拜殿近くに放置されている宝篋印塔は一体誰の墓なのか



徳源院を訪ねた時に、北畠具行卿の墓（宝篋印塔）が十二相神社のものとそっくりなので驚いた





天台宗寺院の徳源院は中世、北近江を支配した京極家の菩提寺。本堂の裏山斜面には京極高豊が集めた京極家歴代34基の宝篋印塔が並ぶ（国の史跡）が、このはずれに十二相神社の宝篋印塔と似た北畠具行卿の宝篋印塔があった

はないか。六角氏に佐目で住むように言われ、佐目に来てみたら京極氏系の宝篋印塔があり、川へ捨てたのではないだろうか。

十二相神社の境内を古道が通っている。古くから多くの人々が伊勢の国、美濃の国へ行く重要な道路であった。一千年程前からある十二相神社は、ここから山越えをしていく道中の旅の安全を祈り、休憩をした場所であったようだ。

十二相神社には本殿、拜殿のほか、地蔵堂が二社あり、拜殿の中には石地蔵が一体祀られている。拜殿の裏には80体程の石地蔵が並べられている。拜殿は間違いなく寺院であり、神仏習合時代に神社として建てたものである。それを今は拜殿と言っている。

初代の神社が古くなり建て替えた時に宝篋印塔を移動して、そのまま今日に至っているのかもしれないが、一体だれの宝篋印塔だろうか？

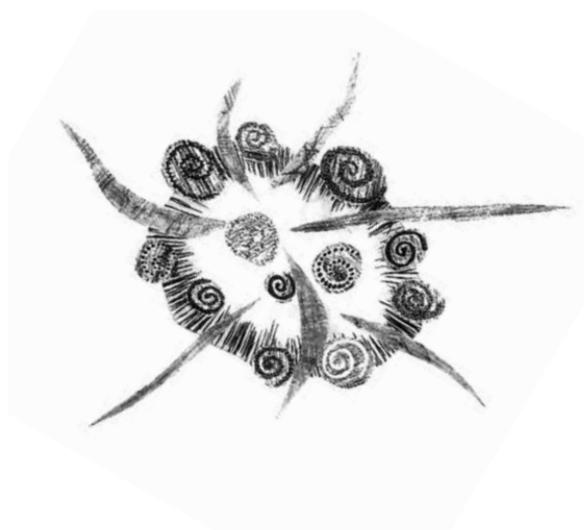
5 十二相神社



寺院建築の拝殿（上写真）は神仏習合の名残りか。拝殿裏には阿弥陀さんや地藏さんの石仏が集められていた（下写真）

6

法蔵寺
ほうぞうじ



法蔵寺の変遷

14世紀から15世紀にかけて約100年の間、法蔵寺という寺が佐目にあった。今は彦根市河瀬にある法蔵寺がその寺である。佐目に来る前は、犬上郡豊郷町石畑にあった。

法蔵寺の話は「那須与一（なすのよいち）」から始めなければならない。与一は平安末期、鎌倉初期の武将であり、源義経に従って活動をしており、『平家物語』等で有名な武将である。とくに平安時代末期に讃岐国屋島（香川県高松市）で行われた源平合戦「屋島の戦い」（1185）では弓の名人として今でも伝えられている。

この戦いは平家が負け、源氏が勝った。那須与一は「戦いは勝っても負けても人は血を流し、命を落とす民衆を不幸にし、社会に不安を与えるだけだ」と悟り、31歳（1199）の時に鬻（まげ）を切り落とし、出家して仏門に入った。やがて法然の弟子になり「宗高」と改名をして僧侶になり、貞永元年（1232）に伏見の即成院（そくじょういん）で亡くなっ

ている。

那須与一の次男宗信は正嘉2年（1258）9月7日夜、木部毘沙門大王の靈告を受けて出家し、親鸞聖人より門徒号を受け石畑村の木部両所領主となり文永7年（1270）、本願寺派三世覚如（親鸞の孫）より「弘誓寺（ぐぜいじ）」の寺号を受けている。

那須与一の孫宗政（法名性愚）は、覚如が関東経廻の帰途弟子になり帰京に随従。犬上・愛知・神崎・坂田4郡の300余りの村々を回り多くの門徒を得て、延元2年（1337）覚如より「称名寺」と寺号を授かった。宗政の長男慈空が「弘誓山称名寺」として四代目を継ぎ、三男の善明が門根（石畑）に「白鳥弘誓寺」を開いた。

佐目法蔵寺

戦国の始まりと言われる応仁の乱（1467年発生）の影響で布教が厳しくなったため、文明4年（1472）、白鳥弘誓寺は、拠点も鈴鹿山中の佐目に移し、寺号を「法蔵寺」に改めているが、文永7年（1270）、覚如が石畑に庵室を構えたことが始まりとされている。戦国と言われた時期には佐目（左女谷・左目・サメ）の法蔵寺として寺基はここにあり、湖北の真宗本願寺の拠点的な役割を担った。

石畑の法蔵寺は、文永7年から文明3年（1471）の間、初代性愚、二代善明、三代教

善、四代教願、五代教乘、六代教恵、七代教専と続く。七代教専の時、応仁、文明の乱がおこり、戦乱の兵火は法蔵寺のあつた石畑にも及んできた。

時代が大きく動くにつれ、人の動きも激しくなり、法蔵寺もはや石畑周辺で教化を続けることが困難になり、文明4年（1472）宗主の命により近江、美濃、伊勢国に通じる三国の接点である佐目を選び、佐目に拠点を移したのではないか、というのが私の推論だ。

古文書には「永正八年辛末口月十日書之」「江州犬上郡甲良庄保内佐目畑保内法蔵寺常住物也、願主釈教専」と記され、間違いなく永正8年（1511）には佐目の地に法蔵寺は存在している。佐目法蔵寺は山科本願寺の破却後、本願寺派第十世証如が本願寺を大坂の石山に移した以後であるようだ。石山本願寺は戦禍に備え、寺辺の警備のため周囲に濠をめぐらし堅固な守りにしている。寺内には周辺の門徒や各地の門徒衆が輪番で番衆が編成され、佐目法蔵寺もその番衆として編成され本願寺の警備にあたった。佐目法蔵寺は七代教専から佐目の地に移り、八代教明、九代空明、十代順明、十一代了明、十二代専明までつづく。法蔵寺は天文年間以後も本願寺への勤番を勤めており、九代空明は石山籠城の褒賞として本願寺派第十一世顯如より自筆の「十字名号」を拝領している。

佐目に来た法蔵寺七代教専から十二代専明の天明4年（1472）から天正2年（1574）までの記録が殆んどない。当時は法蔵寺のことを、近江国犬上郡左女谷道場と言って

いたらしい。左女谷道場宛の古文書が二通残っている。

密使を以つて進達せしめ候。扨て近日、佛敵信長め、大群もて石山の御営へ押し寄せ候趣注意これあり。防衛の用意有りと雖も、微力の為、敵対かたし。御宗旨の退転、此の時と歎わ敷く存じ候。早々、中の郡の門徒、加勢せしむ可き様、取り計らい給う可く候也。

元龜元年（1570）九月七日

楠太郎右エ門

下間与四郎

密使を以つて、啓達せし候。扨て、雜賀の三藏、根来の杉の坊、佛敵信長に降参、かの兩人、案内を為し候。秋田城之助、北畠中将、神戸三七等、其の勢三万騎、雜賀に押し寄せ来たり候、注意之有り。追々味方の軍勢馳せ集まり、坊築の用意に候。其の御国、中の郡門徒、夜を日に継ぎ、馳せ着き、加勢之有る可きやう取り計らい給う可九候也。

天正五年（1577）二月五日

下間与四郎

鈴木孫一

最初の古文書は、織田信長が石山本願寺（今の大阪城の地）に大軍を率いて攻撃をした元亀元年九月に石山本願寺より届いている。信長が石山本願寺を攻めたのは九月十二日だから、その六日前の九月七日付で密書が佐目の法蔵寺にきていることになる。

「左女谷道場」とは法蔵寺のことであり、当時の「中の郡」と言うのは蒲生、神崎、愛知、犬上、坂田の5郡のことである。その中心的な位置をしめているのが法蔵寺であった。石山合戦の乱世も治まり、再び江州へ引き返すとき、山中にある佐目の法蔵寺では勸化（かんげ）に不便であった。河瀬にあった天台宗「獅子吼山遠久寺（ししくざんおんきゅうじ）」は、応永20年（1413）、美濃の国、多芸郡志津野中へ移動していた。

12代専明は佐目法蔵寺が最初にあった石畑ではなく、河瀬（彦根市）の遠久寺跡へ寺基を移した。

しかし、天正9年（1581）に「近江国犬上郡佐目法蔵寺常住物也、願主釈空明」とあり、また、文禄年間（1592〜1596）の本願寺の記録にも「サメ法蔵寺」と記されている。佐目の法蔵寺は文明4年（1472）から天正2年（1574）の約100年の間、佐目に寺基があった。

現在の遠久寺（えんきゅうじ）に現存する古文書には

「大永二年之頃、兵乱差起こり、佐目村へ引つ越し、住居致し、其の後、五代目了明住職迄、

相続、仕来……」とある。大永年間は永正の後で、享祿の前の1521〜1528年。大永2年（1522）のころに佐目村へ引越したことになる。

彦根藩との関係

彦根藩と法蔵寺の関係は、慶長6年（1601）井伊直政の佐和山就封以後、法蔵寺は彦根藩の配下に置かれている。彦根藩の非常時における軍事、警察的な役割を担っていた。

現在の法蔵寺は、延宝2年（1674）出火により貴重なものを焼失している。佐目法蔵寺に関する資料が残っていないのもこの火災で消失している可能性が大きいと思われる。

いずれにしても、佐目にあった法蔵寺の歴史を知る貴重な資料が見つけれないのが残念でたまらない。

元河瀬から美濃国志津（海津市南濃町志津）に移った天台宗寺院は現在、「獅子吼山遠久院本慶寺」という真宗大谷派の寺院になっている。

佐目の「発吼山遠久寺」、河瀬の「獅子吼山法蔵寺」、岐阜の「獅子吼山遠久院本慶寺」は深いつながりがありそうだ。

法蔵寺史には「文明四年（1472）犬上郡大滝村佐目に移り、翌五年再建」とある。

戦国の世もだんだんと平静を取り戻し、石山合戦も終わり世の乱れも治まってきたので、

山の中にある法蔵寺は教化に不便を感じ十二代専明の時代に石畑でなく河瀬に寺基を移している。その場所は、元天台宗獅子吼山遠久寺のあった所である。

応永20年（1413）に獅子吼山遠久寺は、美濃の国多芸郡志津村野中へ移動している。

その後、佐目の法蔵寺は慶長7年（1602）から元禄8年（1695）まで「富尾保内佐目法蔵寺」と寺名を変え、宝永6年（1709）から安永9年（1780）まで「佐目法蔵寺」として本願寺籍台帳にある。

法蔵寺の古い御堂は、松尾（愛荘町）の教専寺に売却して享和3年（1803）に今の遠久寺の場所に再建している。遠久寺は、1814年「発吼山遠久寺」として本願寺より公称されている。この時から佐目の住民は、法蔵寺門徒から遠久寺門徒に変わっている。

遠久寺と言う寺号は、獅子吼山遠久寺（応永20年美濃の国志津に移動）の「遠久寺」を付け「発吼山遠久寺」とし、河瀬の法蔵寺は獅子吼山を付け「獅子吼山法蔵寺」としている。

6 法蔵寺



彦根市の河瀬公民館近くにある獅子吼山法蔵寺



6 法蔵寺



法蔵寺は浄土真宗本願寺派の寺院で、本堂は享保12年（1727）、第七代彦根藩主井伊直惟の姉幾久姫の援助を受けて建立されたと伝わる。境内のイチョウの木は彦根一の大木

法蔵寺の変革

1185年 宗高（那須与一）17歳、屋島の合戦

1199年 31歳出家、法然の弟子、近江の国石畑木部両所拝領す

1233年 宗高、8月18日、64歳で死亡

1258年宗信（与一二世）法蔵寺開基、9月7日木部毘汝門大王ノ靈告ニ

テ出家ス依告為親鸞聖人門徒号願名坊 石畑木部領主

1270年 白鳥弘誓寺、本願寺三世覚如より寺号受ける

1311年 宗信、5月22日死亡

1337年 性愚（与一三世）12月15日覚如より称名寺号受ける。「由緒書写」には性愚

が覚如から庵室を譲られ、法蔵寺の寺号を賜り神崎、愛知、犬上、坂田の教化に当たるとある

1471年 これまでの法蔵寺住職、初代性愚、二代善明、三代教善、四代教願、五代教

乗、六代教恵、七代教専

1472年 法蔵寺佐目に移る

1573年 これまでの住職、八代教明、九代空明、十代順明、十一代了明、十二代專明

1574年 法蔵寺河瀬に移転、石山合戦のあと、乱世も治まり山中にあっては教化に不

便なため、天台宗獅子吼山遠久寺の地に寺基を移した

1602～1695年 富尾保内佐目法蔵寺

1709～1780年 本願寺籍台帳には佐目法蔵寺とある

1814年 3月18日発吼山遠久寺、寺号本願寺より公称

1876年 10月23日法蔵寺門徒より独立して発吼山遠久寺

佐目法蔵寺十代順明

石山本願寺と織田信長の戦いは、石山本願寺合戦とか石山戦争とか呼ばれているが、今の大阪城のあたりに本山があつて、ここを拠点に10年あまり（1570～1580）戦つたといふ。

前半は石山本願寺が優勢に戦っていたが、後半は信長が優勢になり、勅命講和（正親町天皇の名のもとに講和する）により、石山本願寺十一世顕如は、天正8年（1580）大坂を退き紀州鷺ノ森御坊へ移つた（4月10日）。

この戦いは、信長が石山本願寺を攻めることによつて大坂湾を手に入れる狙いがあつたやうだ。

このとき顕如が佐目法蔵寺十代の順明に出した書状である。鷺ノ森へは順明も同行して

いる。

法藏寺順明宛頭如書狀（翻刻文）

「今度大坂退出之時、坊主衆ニ雖在申聞旨不致同心、剩狼籍之働、言語道断之次第候、然処順明儀者雖為若年、則聞分、開山聖人之御供申出、紀州罷下儀、真実々々難有覚候。向後尚堅固之信心に住せられ、門徒にも能々勸化せられ、もろともに極楽之往生をとけられ候ハんする事、肝要候。以来も無油断、仏法・世間ともに可相嗜候、返々此般之覚悟無比類こそ候へ。弥成其心得、可被御馳走者也。穴彼賢々々」

天正八年（1580）卯月二十八日 頭如

法藏寺 順明へ

読み下し文（注釈付）

「このたび大坂退出のとき、坊主衆ニあつても、もうしきかさずむね、同心いたさず、あまつさえ狼藉のはたらき、言語道断の次第せうろう、しかるところ、順明儀は若年たりといえども、すなわち、ききわけ、開山聖人のおとも申し出で、紀州まかりくださるぎ、まことまことにありがたくおぼえせうろう。今後尚もつて堅固の信心に住せられ、門徒にもよくよく

勸化せられ、もろともに、極楽之往生を遂げられそうろうはんずる事、肝要そうろう。今後も油断なく、仏法・世間ともにあいたしなむべくそうろう、かえすがえす今般の覚悟比類なきこそ候へ。いよいよそのこころえをなし、御馳走さるべきものなり。あなかしこあなかしこ」

天正八年（1580）四月二十八日 顕如

法蔵寺 順明へ

多賀町 佐目

佐目法蔵寺

実如より「法蔵寺」と賜る



1780年まで「佐目法蔵寺」として本願寺籍台帳にあり、1814年「発吼山 遠久寺」と本願寺より公称

えんきゅうじ 発吼山 遠久寺

十二相神社

奈良時代以前に佐目村あり

①

1390年分社

岐阜南濃町志津 野中

獅子吼山

遠久院 本慶寺

1603年 現在地 **南濃町津屋** に移す

十二相神社

- ① 1390年、南濃町志津に分社された十二相神社は1470年六角家臣佐和山城主小川十平、1581年 明智光秀の旧き好み小川祐忠により再興。軍事的にも利用か。
- ② 池田定信の子貞貴が川瀬氏始祖。子孫川瀬氏による『河瀬城由緒書』あり。4代目が1413年志津に移り遠久院 本慶寺開祖。定信より6代目貞利の室が津屋城 高木八郎左衛門正則の娘であった縁から、関ヶ原戦いで負けた津屋城に本慶寺移動。志津野中の日本慶寺跡には墓がある。
- ③ 兄が称名寺、弟が白鳥弘誓寺を。白鳥弘誓寺が佐目に移転後『法蔵寺』と実如より寺号を賜る。

十二相神社・法蔵寺・遠久寺の移動

豊郷町 石畑

弘誓山 称名寺
弘誓寺
1270年
1337年
白鳥 弘誓寺

彦根市 南川瀬

獅子吼山 法蔵寺
獅子吼山 遠久寺・南河瀬城
おんきゅうじ
南北朝時代(1336-1392年)
佐々木道誉の兄 池田定信 開祖・築城



- ④ 1574年、荒れていた川瀬の遠久寺跡(南河瀬城)に移動、この年にはまだ石山合戦は終了しておらず、同年 織田信長の第三次伊勢長島一向一揆攻めがあり、本願寺番方として石山合戦に参加していた佐目法蔵寺はそのルートの一つにあり、事前の情報もしくは寺を荒され避難した可能性も考えられる。
- ⑤ 「川瀬之法蔵寺」と文書に出てくるのは、1614年井伊家の書状で(彦根城博物館『法蔵寺の歴史と美術』)、例えるなら1814年(文化11年)までは「法蔵寺(川瀬)」が本社「佐目法蔵寺」が支店のような立場で、これを機に佐目は法蔵寺門徒から「遠久寺」門徒となった。

7

明智光秀の多賀出身説



光秀の出目綴る『淡海温故録』

生まれた所がはっきりしない明智十兵衛光秀は謎の多い武将として、2020年大河ドラマ「麒麟がくる」で人気をよんだ。享祿元年（1528）に生まれていると言われているが、生まれたとされる所は岐阜県瑞浪市や大垣市上石津など6ヶ所もある。これも大きな謎である。

第13代将軍足利義昭に仕える永祿6年（1563）に初めて役人名簿に足輕衆「明智」と出てくるのが、歴史上確かな資料であるようだ。

近江・多賀出身説の資料に、滋賀県の地誌である『江侍聞伝録（ごうじもんでんろく）』『淡海温故録（おうみおんころく）』『近江興地志略（おうみよちしりやく）』『淡海木間攷（おうみこまざらえ）』の4誌がある。その中に明智十左衛門が佐目に住んでいたとある。

十左衛門の子十兵衛光秀は、器量が勝れているので越前朝倉氏に仕えることを望んだと記

されている。確かに福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館には「光秀一乗に来る」と大きく書かれている。

朝倉軍の勝利に貢献

一乗谷に行く前は称念寺門前（福井県坂井市丸岡）でしばらく貧しい生活をしてきたようだ。その厳しい生活期間に武術を身に付けた。また寺子屋等を開き、自ら文武両道を研鑽している。

とくに火繩銃の技術を身に付け加賀一向一揆が越前に襲来した時、光秀は朝倉軍に力を貸し勝利に貢献している。この時期に朝倉義景に鉄砲指南役として仕官しているようだ。

一乗谷朝倉の近くである東大味で5年程住んでいる。この時光秀の三女「たま」（細川ガラシャ）が生まれている。

永祿10年（1567）9月に足利義昭が朝倉義景の一乗谷を訪れ滞在している。その時期に光秀が、足利義昭の家臣、細川藤孝を通じて、義昭に仕えるようになったという。

また興聖寺（滋賀県朽木）で義昭と細川藤孝が6年半程在したことがあり、光秀も興聖寺にも何度か来ている。

明智十兵衛光秀の生まれた所の謎を解くのは、やはり父親明智十左衛門をさがし出すのが



『淡海温故録』の説明看板(上写真)は明智十兵衛口伝の地・十兵衛屋敷跡(下写真)近くに立つ

先決だ。

光秀の出身伝説と『淡海温故録』

近江国の地誌で貞享年間（1684～1688）に成立して井伊家に献上されたという『淡海温故録』（滋賀縣立琵琶湖文化館蔵）は、中世の土豪や社寺のことを詳述する。

巻3乾（第5冊）幕末期写の犬上郡左目（佐目）の項目には明智光秀の出身伝説が書かれている。同様の話は享保19年（1734）に成立した『近江輿地志略』にも書かれているが、これより成立が早い『淡海温故録』は次のように原型を伝えている。

その説明看板が多賀町佐目にある明智十兵衛口伝の地・十兵衛屋敷跡に立っているので、幕末期の写文と現代語訳を紹介してみよう。

写文

左目（佐目）此処ニ明智十左衛門居住スト云、明智ハ本国美濃ノ者ニテ土岐成頼ニ属セシカ、後ニ成頼ニ背テ浪人シ当国ニ来リ、六角高頼ヲ頼ミ寄ケル処、尾形日明智ハ土岐ノ庶流旧家也トテ扶助米ヲ与ラレ、二三代モ此処ニ居住スト云、息十兵衛光秀ニ至テ、器量勝レタル者ニテ越前ヘ立ち越朝倉家ニ仕ンコトヲ望ム、其節往来ノ道中ニテ川流ノ大黒天ヲ拾ヒ人ニモ

語ラス秘シ置シカ、好身ノ者共ノ取持ニテ朝倉殿へ目見相調テ、義景ヨリ二十貫ヲ賜リ屋敷モ拝領シテ後、近処ノ諸士取持ノ人々等ヲ祝儀ニ呼登参会ノ上ニ、彼拾タル大黒天ノコトヲ語リケレハ衆人皆目出度コト也ト祝、明智聞テ川流ノ大黒ヲ拾ヒ何分ノ幸ヤアルト聞及玉フト云ヘハ、人々云ケルハ大黒ヲ拾ヘハ千人ノ頭ヲ持ト古今云習セリ、然レハ貴所ハ追付御取立物大将ニナリ玉ハント云、衆人皆退散ノ跡二十兵衛独言シテ曰、吾千人ノ頭ハ全ク望ニアラス、信仰シ頼ムトモ千人ニ限ラハ詮ナシト、又川へ流シテ朝倉家へハ本国ヨリ尋求ラル、間飯リ度由ヲ申シ、暇ヲ乞直ニ尾劔へ行信長公ニ属シ段々立身シテ、惟任日向守ト改メ丹波一國ニ当國志賀郡ヲ添賜リ大身トナレリ、兼テハ更ニ逆意ハアラサリシヲ、不慮ノ思立出テ甲劔武田家ヲ語ラヒケル処ニ、勝頼ニ滅亡故存念相違シタル由甲陽軍鑑ニモ見ヘタリ、然処其年五月、家康公穴山梅雪ヲ御同道ニテ上洛ノ時、光秀ニ馳走役ヲ信長公仰付ラル、其馳走ノ支度不宜トテ蹲居タル光秀ヲ足ニテ踏玉フト云、光秀思ヤウ、扱ハ我逆意ヲ知テ如此ナルヤト覚悟シテ早速逆心シケルト也、然レトモ大恩ヲ請ケナカラ天理ニ背キタルコト故一人モ与力加勢スル大名モナケレハ、昔ノ旧キ好身ヲ尋当國ノ先方共ヲ頼ミケレトモ外ハ一人モ同心セス、多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守六人ハ運尽テ同心シ、山崎ノ一戦ニ没落シ皆零落ニ及ケル、此中ニ小川土佐守、池田伊予守人ハ理リアリテ秀吉公ニ降参シテ相続ナレトモ終ニハ両家共ニ断絶ス

現代語訳

左目（佐目）のところ明智十左衛門が住んでいたという。明智は本国美濃の者で土岐成頼に属していたが、後に成頼に背いて浪人になり、近江国に来て六角高頼を頼って寄宿。尾形（高頼）が言うには、明智は土岐氏の庶流で旧家だということで扶助米を与えて二、三代の間、佐目に居住したという。明智十左衛門の息子である十兵衛光秀に至っては、器量が勝れた者なので越前国へ立ち越し、朝倉家に仕えることを望んだ。そのとき光秀は道中で「川流の大黒天」を拾い人にもそのことを語らず秘密にしておいたが、好身の者どももの取り持ちで朝倉殿へのお目見えが調って、朝倉義景から二十貫を賜り屋敷も拝領した。その後、近所の諸士や朝倉家への取り持ちをした人たちを祝儀に呼んで参会の上で、拾った大黒天のことを初めて他人に話したところ、衆人はみな「めでたいこと」と祝った。光秀はそれを聞いて「川流の大黒を拾って、どのくらいの幸せがあるとお聞きおよびですか」と人々に尋ねた。人々が言うには「大黒を拾えば、千人の頭になれると、古今言い習わしていますよ。あなたは追っつけ御取立てされ物（頭）大将になられるだろう」と言った。衆人が退散した後には十兵衛光秀が独り言では「私は千人の頭など全く望まない。信仰して頼むといっても、わずかに千人に限られるのであれば詮のないこと」と。そこでまた大黒天を川へ流して、朝倉家へ

は本国から尋ね求められたので帰りたいと言い、暇を乞うて直に尾張国へ行つた。尾張国では織田信長に属し、だんだんと立身出世して名乗りも惟任日向守と改め、丹波一国に加えて近江国志賀郡（滋賀）添え賜つて、大身の大名となつた。兼ねてはさらに逆意はなかつたが、不慮の思いが立ち出て、甲斐国の武田家を語らつて陰謀を図っているうちに武田勝頼が滅亡してしまつたため存念が相違してしまつたのだと、『甲陽軍鑑』にも書いてある。天正十年五月、徳川家康公が穴山梅雪を同道して上洛されたとき、信長公は光秀に仰せつけになつた。その馳走の支度がよろしくないといつて、信長がうずくまっていた光秀を足でお踏みになつたという。光秀は、さては私の逆意を知つてこのようになつたのだらうと覚悟を決め早速逆心したのだという。そうはいいいながら大恩を受けながら天の理に背いたことであるから、一人も与力・加勢する大名がなかつたので、昔の古い好身（よしみ）を尋ねて近江国の先方たちを頼んだけれども、他には一人も同心せず、ただ多賀新左衛門、久徳六左衛門、阿閉淡路守、小川土佐守、後藤喜三郎、池田伊予守の六人は運が尽きて同心し、山崎の合戦に敗れて没落し、皆零落してしまつた。このなかで小川土佐守、池田伊予守の二人だけは理由があつて秀吉に降参して当面は相続したけれど、最終的には両家ともに断絶した。

要約すると「明智は本国美濃の者で、土岐成頼に属していたが後に成頼に背いて浪人し、近江の国に来て六角高頼を頼つた」と。

明智十左衛門は、美濃の生まれで美濃守護大名土岐成頼の家臣であったのは間違いないだろう。明智十左衛門でなく「明智頼典」と言う家臣であったのかも分らない。近江の国に来て名前を「十左衛門」に変えたのだろうか。六角高頼を頼ったというのは間違いない。

その当時は、土岐成頼と六角高頼は敵対関係にあったようだ。さらに六角と京極は同じ一族でありながら、争っていた時でもある。

六角は、自分を守るためにも佐目に十左衛門を住ませたのだろうか。それは一時的にも京極との争いを守るためである。

そのように解釈すると『淡海温故録』が素直に理解できる。

佐目の歴史を調べていると、少し違うように思う。応仁の乱（1467）があり、東軍と西軍に分れての戦いである。その時西軍に土岐成頼、六角高頼、東軍に京極持清がいた。

近江戦国の山道が佐目を通して伊勢の国、美濃の国へ通じている重要な戦国街道である。

六角にしてみれば重要な拠点として街道を守るために、土岐成頼の下臣である十左衛門を佐目に住ませたという見方もある。そうして明智十兵衛光秀が生まれたと解したい。

8

光秀の末裔、まつえ三宅さん



三宅藤兵衛重利

三宅由珠さんが、十兵衛屋敷跡へ訪ねて来られた。もちろん明智光秀に関係する人だ。話を聞くと明智光秀の末裔で第十四代目だそうである。十兵衛屋敷跡の説明をした後で、三宅さんに光秀の末裔であるのなら詳しいお話をして下さいとお願いをした。由珠さんから聞いた話を書き残す。

三宅さんのご先祖は光秀の娘「倫」（細川ガラシャの姉）と、光秀の家老・明智秀満との間に生まれた、「三宅藤兵衛重利」という人の末裔である。

「倫」は荒木村重に嫁いたが、村重が信長に謀反したので離婚し、明智家に戻された。

その後、光秀の家老・三宅弥平次（三宅藤兵衛重利）と再婚して、弥平次は光秀の娘婿となり、名を明智秀満と改めている。この人が明智左馬之助であるが、左馬之助は物語に出てくる名前で、古い記録には弥平次と出てくる。

本能寺の変の時は、三宅由珠さんの御先祖である「三宅藤兵衛」は2歳で、坂本城から落ち延び、後に細川ガラシャに保護され、ガラシャが藤兵衛に宛てた直筆の書状が今も残っているらしい。

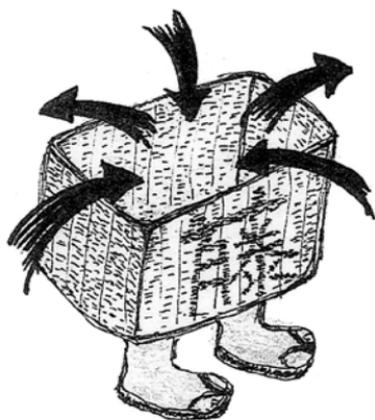
藤兵衛は成人になり、細川藩（ガラシャ）を離れ、唐津藩・富岡城の家老となり、天草島原の乱で討死している。その子孫は細川藩に戻され、代々肥後細川藩の重臣として、現在まで途切れなく続いていると由珠さんは話す。

熊本の三宅家の息子として生まれた一人が、長崎の島原に移住して分家したのが三宅由珠さんのお父さんのご実家だ。

三宅さんが最後に話されたのが、細川藩や三宅家に残る史料のなかにも光秀の出身地は不明で「藤兵衛も明智の名をはばかって秀満の旧姓三宅を名乗ったくらいですから、光秀関連の史料は消されたか隠されたか、どちらかだと思います」と話しておられた。

9

葛籠藤
つづらふじ



佐目は青藤の生産地

澤田家の家系図に「藤」の付く名前の男性が37名いる。不思議に思い先祖を色々調べてみると「葛籠（つづら）」につき当たると。

葛籠の材料は青藤で、山に自生している。その青藤を川につけ皮をむくと葛籠織の材料になる。

鈴鹿山系にある佐目周辺の山に多くあり、地元の人々が採ってきた青藤を集め、葛籠職人のいる葛籠町（彦根市）に納めていたようだ。古い資料によると佐目周辺の山は近江の国で一、二を争う藤の生産地であったらしい。

『江左三郡録』と葛籠

葛籠の製作産業に携わった人々は、中世後期以来、一種の組合組織である「講」を結成し

ており「九社講」と称していた。明和2年（1765）に編纂された犬上・愛知・坂田三郡の地誌『江左三郡録（ごうささんぐんろく）』には葛籠について次のようにふれている。

「葛籠ヲ製ル事ハ、足利將軍義詮公都ヲ落来リ暫ク此所ニ御座アリ、御簾中御座有テ若君誕生アルニ、間ナク早世ニテ、其母公悲ミニ堪ス尼ト成テ「惺悟禪」尼ト云、義詮ハ都へ還リ玉ヒ、禪尼此所ニ留マリ玉ヒテ、其子ノ菩提ヲ弔ヒ玉フ、常ニ葛籠ヲ造テ慰ト世リ、附従フ者モ造之ヨリ始マルト云伝フ、今桐ノ紋ヲ附ケタル少キ葛籠ヲ此所ニテセイゴト云、是被禪尼ノ造始メラレタル故也ト、昔ノ巾箱ナル由、今葛籠細工ヲスル者ハ、禪尼ニ附従ヒ居タル者ノ子孫也ト云、他家ノ者ニ此業ヲスル事ヲ許サズ。」

「足利尊氏の子義詮が文和4年（1355）後光厳天皇を奉し西江州に戦い、湖北を経て大垣を平定し、翌5年京都に帰ることになった。義詮に同行していた側室が途中産気づき男の子を出産した。付人として家臣九名がこの地に残り保護した。君子は幼くしてなくなった。生母は悲しみのあまり髪を下ろして惺悟（せいご）禪と称して尼になり、この地に一庵（松寺）を結んで幼君の後世を弔った」という内容だろう。

この場所（葛籠町や松寺村）に土着した家臣九名が藤葛で作った葛籠を生産することになり、松寺村の北方に一社を祀ったのが「産の宮」である。

「藤材の買い付けは佐目村で」

元龜4年(1573)當時の葛籠職人たちが「葛籠職商売座」を作り、家督の相続や葛籠製作の原料に関して強固な取り決めがなされている。その中に「藤材」は左目(佐目)村で買い付けることが決められていた。

元龜4年(1573)の取り決め文章のなかに次のようなものがある。

葛籠職商売座定置条々之事

一、葛籠座衆中之雖為子、自今以後女子者職不可赦也

但、当在所中者、雖為女子為人具捨石於差出、可為衆中事

一、親之不申合縁付候女子者、一切職不可許也、為惣

中可遂糺明、到于其時雖為親子兄弟縁者頭鼻肩之

無沙汰永代不可有許容、若相許候者有之、過米拾

石可差出事

一、葛籠草買山之儀、自先祖之買付有之場所致盜賣候

者有之者、聞付次第過米二石可差出也、此儀兎角

相紛虚論之中、聊実犯之儀有之者、其時之地頭之

相届可処盗人之事

一、

佐目村葛籠草之相場者、其時為惣中可相定間、右

相場に可買取者也、此外以賄賂或土産致拔買背有

之者、聞付次第過米一石可差出者也、且亦佐目村

並諸畑中徑日逗留而買取者、其身一人之時不及是

非、見逢候者有之者、其者江可配分事

一、

猶子養子之義其親々之職不受継家出者致葛籠織同

敷起請文、為書可有猶子、若起請文相破儀有之者

為惣中可相計事

右、総衆中、以起請文定置条敷也、

元龜四癸酉年六月十三日 (惣衆人名)

天正19年(1591)4月27日付で秀吉が石田三成に蔵入地代官を命じた時の『近江国犬

上郡、坂田郡、美濃国御蔵入所々目録』に、すでに「葛籠町」の地名が記載されていること

から、葛籠の製作は中世期に遡っての産業であったことがうかがえる。当初は街道を行き来

する人たちへの供給を目的にしていたが、葛籠職人の技術を活用して国内はもとより、遠く

中国大陸へも出荷されていたという。佐目の青藤が葛籠職人の手によって中国に渡っていたことになる。



つづら籠

10

家系図

「狭々城卷」



百々家と狭々城巻

「狭々城巻」という家系図が百々家（どどけ）にある。これは宇多天皇から始まる家系図である。狭々城巻の狭々城というのは、佐々木のことである。昔、近江国蒲生郡に大彦命（おおひこのみこと）の子孫「狭々城山君」（ささきやまのきみ）が住んでいたと言う。現在、佐々木氏（六角氏・京極氏）の氏神である佐々貴（沙沙貴）神社や佐々木城（観音寺城）跡があり、佐々木六角に関係する地域である。

佐目の歴史の中でも百々家というのは貴重な存在である。

17世紀の初頭、坂田郡本郷（現米原市本郷）より佐目に医者として迎えられたのが百々博意医師である。なぜ医者が山の中の村に来られたのかはわからない。

博意医師は曹洞宗の檀家で信仰心の深い家系だ。岐阜県関ヶ原町今須にある曹洞宗寺院妙応寺に行けばその存在はよく分かる。佐目に博意医師が来られた時は、佐目に法蔵寺という

寺があり、無住職の時期もあった。

佐目法蔵寺は浄土真宗であり、博意医師は曹洞宗である。

その当時は神仏習合の時代で十二相神社にも寺があった。寺は地元の人たちが管理し、観音菩薩像と地藏菩薩像二体の仏像があった。この仏像を安置されたのが博意医師ではなからうかというのが私の推理だ。

百々博意医師の存在

二体の仏像の台座裏には「享保三年（1718）大仏師文太夫」と書かれている。百々博意医師が佐目に来られた時代と重なるのである。

また佐目の百々義彦氏の仏壇の中に博意医師のご母堂の法位が書かれた仏像があり、命日が「享保四年四月十日」とあった。

佐目の歴史を調べている中で、昭和2年（1927）に十二相神社の屋根の銅板が張り替えられていることがわかった。その時の佐目区長が博意医師の子孫である百々貫三氏である。屋根修理の時は必ず仏像や神像は他に移動しているから、観音菩薩像や地藏菩薩像の金箔の修理は百々貫三氏が自費でされた可能性が高い。

狭々城巻の系図の中に「百々盛實」という名前がある。

「百々盛實 幼少之時父死去依之土岐成頼為介抱、明応乱後同佐渡根之東鳥井本之南移城……」

この文は百々盛實が幼少の時父が亡くなり土岐成頼が後見として世話をしたと記されている。

土岐成頼といえ、『淡海温故録』の中で明智十左衛門が背いた人物だ。十左衛門は佐々木六角を訪ね、六角が佐目に住まわせている。土岐成頼の家臣明智十左衛門が佐目に住み、百々盛實の子孫が現在佐目で暮らしている。

百々博意医師は「百々盛實」の末裔である。何か佐目という土地と土岐成頼は縁がありそうだ。



10 家系図「狹々城巻」



開山が室町時代初めの延文5年(1360)という岐阜県下で最も古い曹洞宗寺院・妙応寺(上写真)。博意医師は曹洞宗妙応寺の檀家だった。米原市本郷には博意医師の生家が残る(写真下)



佐目の百々義彦さんの仏壇に鎮座する阿弥陀如来や十一面観音菩薩の仏像



阿弥陀如来仏像の裏には博意医師のご母堂の戒名と命日の「享保四年四月十日」と刻まれている

11

掘畑道仙



貴重な古い木札

堀畑道仙「道仙」といういかにもお坊さんらしい名前が、なぜ佐目の山間の村人につけられたのだろう……そんな、興味から調べていくと、時代に翻弄された村の歴史にたどり着くことになった。

はじめは、佐目在住の夏原元義さんより「堀畑家」は、由緒のある家だと聞いた時だった。そういえば、以前佐目にあった寺子屋の場所には堀畑という名字の方が住んでおられ、とても頭のいい発明家の方がおられたことを思い出した。そこで、十二相神社近くは今はずき家となった堀畑家の「本家」と思われる家の蔵を彦根在住のご子孫の方に見せて頂いた。母屋の屋根も壊れ、蔵の中もずいぶん荒れているが、座敷にはそれは立派な仏壇があり、その引出しの中でまず目を引いたのが、信州善光寺の書類だった。

佐目は往古よりほぼ浄土真宗本願寺の門徒なのに不思議である。更に古い木札が出てきて、

表には「近江国犬上郡 大瀧社 生国近江 ○○三男 氏子 堀畑道仙 寛政十一己未六月十三日出生」。裏には、「祠官 青山敏次 明治五年壬申正月元日○」。後に「明治十二年四月一四日死」と追記している。

年代から、この「氏子札」は、明治4年（1871）から明治6年にかけて明治政府が行った氏子改（うじこあらため）の木札で、徳川幕府を倒した明治政府が、江戸時代の寺請制度に代わり、国民に対して在郷の神社（郷社）の氏子となることを義務付け、戸籍や身分証明をしたものだが。たった2年で廃止された時の貴重な木札である。

堀畑道仙は寛政11年（1799）生まれなので、道仙72歳の時の木札だ。江戸時代、佐目の十二相神社は『十二相権現社』と言われ、修験者系の僧侶がメインの神社だとわかる。

我々が拜殿と呼んでいる建物は、明らかに「寺院」のデザインで、滋賀県の中でも神仏習合時代の様相が残る神社なのだそう。明治政府の神仏分離令により、神道と仏教を混合して信仰する修験道は禁止され、神職になるか還俗（一般人になること）するかを選ばなくてはならなかった。天台宗とも、浄土真宗とも違うので、無宗派の信州善光寺の門徒にならねたと考えると合点がいく。

残念ながら、火災で昔の文書は残っていないようだとのこと。神仏習合の神社にいた修験者には「家系図以外は焼け」との命令も下ったそう。今、文章での証拠を見つけることは



上写真が表、下が裏。明治政府が行った氏子改（うじこあらため）の貴重な木札。堀畑道仙72歳の頃の木札

できないが、十二相神社のすぐ下には明智光秀の伝承がある十兵衛屋敷跡があり、その敷地内には「見津家」そして、その周り、参道沿いには「堀畑家」と、納得のいく配置である。蛇足ではあるが「祠官 青山敏次」という方は、多賀大社にある日向神社の社僧もしくは神官の関係者だと思われ、神仏分離令の時に大瀧神社に移られたのではと推測できる。

佐目の歴史年代

奈良時代

古代豪族和氣氏出身の「佐目氏」が存在

平安時代 1000～1200年代

十二相神社 御神像（ホタ神様）

南北朝時代 1350年代

十二相神社 宝篋印塔

1390年

十二相神社 岐阜県海南市志津へ分神

1472年

法蔵寺 石畑から佐目に移る

室町時代 1500年代

十二相神社 恩神様

1573年6月13日

佐目の「葛籠藤（つづらふじ）」に関する掟書（葛籠

織職人）

1574年

法蔵寺 佐目から河瀬に移る

1718年

十二相神社 観音菩薩、地藏菩薩（大佛師文太夫作）

江戸中期徳川吉宗時代、本地仏として彫刻（仏師中川

大幹談）

1814年3月14日

発吼山遠久寺 寺号公称

1876年10月23日

法蔵寺門徒より独立 遠久寺門徒

あ
と
が
き



麒麟が佐目にきた

2020年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」が私に新しい生きがいを届けてくれた。

麒麟は実在しない動物だ。生まれは中国のようである。神龍と違い、神を龍の形にしている。神と言うと宗教的で難しく思われるかもしれないが、自然の大きな動きを動物に表したらしい。

『広辞苑』には「中国で聖人が出る前に現れる想像上の動物」とある。そんな不思議な動物が佐目に来たのである。静かな山村に突然、麒麟が舞い降りてきた。

近江の古い地志『淡海温故録』の中の「佐目に明智十左衛門（光秀の父）が住んでいた」という一説が、崩壊寸前の山村に明るい光を届けてくれた。

大河ドラマから思いがけない人々とのつながりが広がり続けている。

光秀出生地の可能性をともし盛り上げた十兵衛会のみなさん。古文書、仏像、考古学など、それぞれの分野に精通されている方々とのめぐりあい。親切丁寧にお力添えをいただき感謝を申し上げたい。

時代は休むことなく動いている。歴史を顧みることは、これからの未来の可能性を豊かにするのではないだろうか。「なぜ？」と思うことは歴史や科学、また生きているうえで自然と考えを深めさせてくれる。次々に湧き出る「なぜ？」を老いボケながら、これからも追

究し続けたいと思っている。

ふるさとの山、陣屋。

ふるさとの川、犬上川北流。

ふるさとは永遠につづく。

ふるさとの歴史は根強く生きつづける。

ふるさとで生まれ、育った八十八年。

私の人生の締めくくりとして、後世に伝えたい気持ちで綴った。

今回の出版に、三田村圭造さん、大矢優基さん、大矢美香さん、澤田藤美雄さん、娘順子にはとくにお世話になった。恵まれたふるさと、恵まれた地域のみなさまに感謝したい。

二〇二四年秋 澤田藤司一

●著者

さわだ・としかず

1936年、多賀町佐目生まれ

〒522-0322 滋賀県犬上郡多賀町佐目626

TEL 0749-47-1805

ふるさと佐目の古いポケつづり

2024年10月1日発行 初版第1刷発行

著者 澤田藤司一

発行人 三田村圭造

発行所 風林舎

〒521-0202 米原市柏原1096

TEL/FAX 0749-57-0340

印刷・製本 ニホン美術印刷株式会社

無断複写・転載を禁じます

乱丁本・落丁本は小社にてお取り替えます

